

2016年7月3日川越教会

## 踊り上る喜び

加藤 享

### 〔聖書〕サムエル記下6章1～23節

ダビデは更にイスラエルの精鋭三万をことごとく集めた。ダビデは彼に従うすべての兵士と共にバアレ・ユダから出発した。それは、ケルビムの上に座す万軍の主の御名によってその名を呼ばれる神の箱をそこから運び上げるためであった。彼らは神の箱を新しい車に載せ、丘の上のアビナダブの家から運び出した。アビナダブの子ウザとアフヨがその新しい車を御していた。彼らは丘の上のアビナダブの家から神の箱を載せた車を運び出し、アフヨは箱の前を進んだ。ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた。

一行がナコンの麦打ち場にさしかかったとき、牛がよろめいたので、ウザは神の箱の方に手を伸ばし、箱を押さえた。ウザに対して主は怒りを発し、この過失のゆえに神はその場で彼を打たれた。ウザは神の箱の傍らで死んだ。ダビデも怒った。主がウザを打ち砕かれたためである。その場所をペレツ・ウザ（ウザを砕く）と呼んで今日に至っている。その日、ダビデは主を恐れ、「どうして主の箱をわたしのもとに迎えることができようか」と言って、ダビデの町、自分のもとに主の箱を移すことを望まなかった。ダビデは箱をガト人オバド・エドムの家に向かわせた。三か月の間、主の箱はガト人オバド・エドムの家にあった。主はオバド・エドムとその家の者一同を祝福された。

神の箱のゆえに、オバド・エドムの一家とその財産のすべてを主は祝福しておられる、とダビデ王に告げる者があった。王は直ちに出かけ、喜び祝って 神の箱をオバド・エドムの家からダビデの町に運び上げた。主の箱を担ぐ者が六歩進んだとき、ダビデは肥えた雄牛をいけにえとしてささげた。主の御前でダビデは力のかぎり踊った。彼は麻のエフォドを着けていた。ダビデとイスラエルの家はこそって喜びの叫びをあげ角笛を吹き鳴らして主の箱を運び上げた。

主の箱がダビデの町に着いたとき、サウルの娘ミカルは窓からこれを見下ろしていたが、主の御前で跳ね踊るダビデ王を見て、心の内にさげすんだ。人々が主の箱を運び入れ、ダビデの張った天幕の中に安置すると、ダビデは主の御前に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげ終わると、ダビデは万軍の主の御名によって民を祝福し、兵士全員、イスラエルの群衆のすべてに、男にも女にも、輪形のパン、なつめやしの菓子、干しぶどうの菓子を一つずつ分け与えた。民は皆、自分の家に帰って行った。

ダビデが家の者に祝福を与えようと戻って来ると、サウルの娘ミカルがダビデを迎えて言った。「今日のイスラエル王は御立派でした。家臣のはしためたちの前で裸になられたのですから。空っぽの男が恥ずかしくも裸になるように。」ダビデはミカルに言った。「そ

うだ。お前の父やその家のだれでもなく、このわたしを選んで、主の民イスラエルの指導者として立ててくださった主の御前で、その主の御前でわたしは踊ったのだ。わたしはもっと卑しめられ、自分の目にも低い者となろう。しかし、お前の言うはしためたちからは敬われるだろう。」 サウルの娘ミカルは、子を持つことのないまま、死の日を迎えた。

### 【序】アシュラムの恵み

先週の28日(火)上尾教会での**埼玉一日アシュラム**に出席して、大きな恵みを受けました。開会礼拝と閉会礼拝以外、昼食を挟んで、午前と午後に各1時間、一人で**沈黙して**示された聖書の箇所を読み、祈り、後の1時間6人のグループで**各自の恵み**を聞き合います。人の話に対して、自分の意見や感想を決して言いません。ひたすら聞くのみです。

今回は開会礼拝で講師の村瀬敏夫牧師が、一人息子の棺の後を泣きながらついていくやもめの母親を見て、**憐れに思った**主イエスが、息子を生き返らせて下さった話(ルカ福音書7章11~17節)を取り上げて説教されました。この「**憐れに思う**」という語は「**はらわたのちぎれる思い**」を現す語で、その語は10章の「善いサマリア人」と、15章の「放蕩息子のたとえ」でも用いられているので、午前と午後の静聴の時間に各自で学ぶようにと、指示して下さいました。

「**善いサマリア人の譬え**」も「**放蕩息子の譬え**」も有名な聖書の箇所ですね。私は教会に通い始めて68年、牧師になって54年です。これまでどれ程の回数ここを読み、また語って来たことでしょうか。でもサマリア人の**はらわたのちぎれる思い**、父親の**はらわたのちぎれる思い**という視点に立って、この箇所を1時間読み直しているうちに、**全く新しい思い**が私の心に湧き上がってきたのでした。驚きました。そして躍り上がるほどの喜びに満たされたのです。そして今年もアシュラムに出席できてよかったなーと感謝しました。

**聖書を独り静かに読み、祈る**ことの大切さが良く言われます。しかしそれで信仰が十分に養われるのなら、わざわざ教会の**礼拝**や**祈祷会**に出なくても良いはずですが。その上に、私は上尾教会の会堂に向いて、あの礼拝堂に座って、私と同じ様に見言葉を聞こう、読もう、祈ろうと願う**兄弟姉妹と共に**、半日を過しました。自分の口で語ったのは午前と午後の分かち合いの時間に各10分弱だけです。でも同じ思いを持つ人と一緒に教会堂で、同じ聖書の箇所を静かに読むことで、これまで聞きとれなかった**新しいメッセージ**を、神さまから与えられたのでした。

私たちの川越教会の会堂での礼拝や祈禱会が、皆さんにとっても、一人の時には得られない霊の恵みをいただく時になって欲しいとの願いを、新たにさせられました。皆さん、霊の糧を求める者たちが、席を同じくして時を過す礼拝、祈禱会はとても大事です。

## 〔1〕奪われた神の箱

さて今日の聖書の学びは、永年にわたっておろそかにされていたイスラエルの神の箱を、ダビデが自分の王国の新しい都エルサレムに迎え入れて、歓喜し、踊りまわった話です。

神の箱（主の箱）の中には、エジプトを脱出して約束の地カナンに戻ってくる途中、シナイ山でモーセに与えられた、神の民として守るべき十ヶ条の戒め（十戒）を記した石の板が納められていました。モーセは12部族の民が宿営する時に、聖なる幕屋を張り、神の箱を安置し、全会衆がこの幕屋に向かって礼拝するように決めました。ですからこの神の箱は、神がイスラエルの民を御自分の民として契約を結び、共に居て下さる臨在の象徴として尊ばれたのです。

ですから移動するときには、レビ族の中のケハト一家が聖なる幕屋の運搬を任せられました。彼らは神聖なるものに触れて死をまねくことがないようにと、神の箱も他の一切の備品も、じゅごんの皮の覆いをかけ、担ぎ棒を差し入れて、肩に担いで運びました。（民数記4章）

さてモーセの代から200年程たちました。神の幕屋はシロ（エルサレムから約40km北）に設けられ、サムエルを育てたエリが祭司として幕屋を守りながら、民を指導する士師の務めも果たしていました。ところが地中海沿岸のペリシテが勢力を伸ばし、侵略してきましたので、イスラエルの民は神の箱を担ぎ出して戦いましたが敗北し、神の箱は奪われてしまいました。こうしてイスラエルは、ペリシテの支配下に置かれます。（サムエル上4章）

ペリシテ人は、ぶんどった神の箱を戦利品として自分たちの町にかざりました。するとその町の神殿の神の像が崩れて倒れたり、疫病が発生したりして、5つの町に次々と死の恐怖が広まったのです。そこで7ヶ月後に彼らは賠償金を添えて神の箱を送り帰してきました。ところがベト・シュメシュでも、神の箱のふたを開けて中をのぞいた人が70人も死んでしまいました。そこでベト・シュメシュの人々も恐れおののいて、キルヤト・エアリムに引き取ってもらい、神の箱は最終的にアミナダブの家に運び入れられました。彼は息子エレアザル

を聖別して、神の箱を守らせることにしました。

## 〔2〕神の箱をエルサレムへ

それから **70 年余**の年月が過ぎました。神の箱が奪われた敗戦のショックで、98 才のエリが死に、その後を継いだ預言者**サムエル**、彼に任命されて初代の王となった**サウル**の代が続きます。しかしサウルもペリシテとの戦いで息子ヨナタンと共に戦死してしまいました。そしていよいよ**ダビデ**の代となったのです。ダビデは、ヘブロンで**ユダの王**になりましたが、他の 11 部族はサウルの 4 男**イシュ・ボシェト**を王に立て、サウル王朝の継続を望みました。

ダビデはヘブロンで7年半を過しましたが、エブス人の要害の地シオンを攻め落として、**エルサレム**と名付けて、ユダの**新しい都**に決めました。そして、それ迄おろそかにされていた**神の箱**を、キルヤト・エアリムからエルサレムに迎えることにしたのです。ここが**ダビデの優れていた点**でした。

平地に都を定めていては、周辺の国からの攻撃に対して安泰とはいえません。しかし要害の地エルサレムなら大丈夫です。さらにイスラエルの民が 11 部族と 1 部族に**分裂**しているのは好ましくありません。どうしたら 12 部族が一つにまとまるでしょうか。ダビデはそこで歴史を振り返り、**モーセに戻ろう**と考えたのではないのでしょうか。

神は、モーセに率いられてエジプトから脱出して来たイスラエルの民を、神が与える戒めを守るならば**神の民**にすると、約束して下さいました。その戒めが**十戒**です。ですから十戒は**神の契約のしるし**です。その十戒を記す石の板を納めている**神の箱**は、民と共に居て下さる**神の臨在の象徴**です。その神の箱をダビデの町エルサレムに迎えることで、**全イスラエルに神の民の一致**を呼びかける基盤にしようとしたのではないのでしょうか。

しかしダビデも**大きな間違い**をしてしまいました。彼は**新しい車**を用意して、**神の箱**をエルサレムに運ぼうとしたのです。神の箱を運ぶ時のケハト族の**しきたり**を忘れていました。彼らは**神聖なるものに触れて死をまねく**ことがないように、神の箱も他の一切の備品も、ジュゴンの皮の覆いをかけ、担ぎ棒を差し通して、肩に担いで運びました。この大事なしきたりを忘れていたのです。それほど神の箱は**遠い存在**になっていたのですね。

案の定、運搬の途中で牛がよろめき、神の箱が車から落ちそうになりました。

付き人の**ウザ**がとっさに手を伸ばして箱を押さえたところ、たちどころに神に打たれて**死んで**しまいました。ダビデは驚き怒り行進を中止し、ガド人**オベド・エドム**の家に預かってもらうことにしました。それにしましても、ウザともあろう者がどうして大変な失敗をして、命を落としてしまったのでしょうか。

ウザの家では 70 年前から神の箱を預かっていました。最初、**アミナダブ**は、息子エレアザルを**聖別**して神の箱を守らせることにしましたが、年月が経つうちに、聖なる箱を預かっているという**緊張**が、一族の間に薄れて来ていたのでしょう。そこでダビデが**新しい車**で運び出そうとした時に、聖なるものにふれないように、担ぎ棒に刺し通して肩で担ぐ**ケハト族のしきたり**を忘れてしまい、ダビデに注意することもしなかったのでしょうか。**聖なる神——汚れている自分たち**という自覚が**おろそかになっていく**私たちの心を、鋭く**反省させる**失敗でした。

### 【3】ダビデの喜び

しかしダビデは**失敗**にくじけませんでした。神の箱を迎えたオベド・エドムの一家とその財産のすべてを主は祝福しておられると知るや、早速出かけて行き、今度は作法通りに神の箱を肩に担がせて、オベド・エドムの家から**六歩**運び出させてみました。大丈夫、異常ありません。ダビデは肥えた雄牛をいけにえとしてささげ、祭司の服麻のエフォドをまとして、主の御前で、力のかぎり**喜び踊り**ました。そして角笛を吹き鳴らし、一同で喜びの叫びをあげながら、神の箱を**エルサレム**に運び上げました。

川越の町でも、年に一度のお祭りの時には、神輿や山車が引かれ、賑やかな笛太鼓と共に子どもから大人まで、着飾った踊り子たちが行列して、身振り手振りも美しく踊りながら町を練り歩きますね。きっとあのようにして、神の箱をエルサレムまで運んだのではないのでしょうか。**ダビデは本当に嬉しかったのです**。そこで兵士全員とイスラエルの群衆のすべてに、男にも女にも、輪形のパン、なつめやしの菓子、干しぶどうの菓子を一つずつ分け与えました。

ところが、ダビデの妻・王妃ミカルは、帰って来たダビデに冷ややかに言い放ちました。「今日のイスラエル王は**御立派**でした。家臣のはしためたちの前で**裸になられた**のですから。**空っぽの男**が恥ずかしげもなく裸になるように。」ミカルはダビデを愛していました。しかし**王妃**としての**気位**と、特に衆人環視の中で裸で踊る**無作法さ**が、女性として、特に妻として、**恥ずかしく我慢できなかった**のでしょうか。彼女は子を産むことなく、死にました。

## 【結】恵みに感謝し喜ぶ信仰

ダビデは**麻のエフォド**という**祭司服**を着て、神の箱を迎えに行ったようです。祭司服にはガウン、タキシードに当たる荘重な礼服から、肩ひもで麻布をつるし、帯で腰に締め付ける簡単な服まで色々あったようです。エリに育てられた少年サムエルは「エフォドを着て幕屋の**下働き**をしていた」(サムエル上2:18)と記されています。これなどは、割烹着のようなものだったのでしょうか。

後で妻ミカルから「はずかしげもなく裸になった」となじられています。本職の祭司でもないダビデなのですから、簡素な麻のエフォドを身に着けて、神の箱を引き取りに出かけたのでしょうか。そこで嬉しさの余り、跳ね回って踊るうちに、エフォドの肩ひもや帯がほどけて、上半身がはだけてしまったのです。でもダビデは**裸になっても踊り続けるほど嬉しかった**のです。どうしてでしょうか。

それは、8人兄弟の末っ子として、家族からも無視されるような**羊飼**いに過ぎなかったこの自分が、今このようにユダの国の王にさせていただいている——**神の不思議な選びと導き**、思いもかけない**大きな恵みと守り**への**感謝**がこみ上げ、溢れ出て来て、じっとして居られなくなったからではないでしょうか。

羊を襲う獅子や熊と戦った時に守って下さった神、その神の守りを**単純に信じて**ゴリアトと戦ったら、小石一発で打倒することが出来たこと。サウル王に妬まれて国中を追い回されても、主に油を注がれた王を殺すことは出来ないと信じ抜いて、**神の守りを頂き**、遂にサウルが戦死した後に、このように二代目の王とされたこと。今まで長い間粗末にされていた神の箱を、新しい都エルサレムにお迎えすることで、奴隷にされていたエジプトからイスラエルを救い出し、ご自分の民として共に居て下さると約束された**全能の主なる神**が、この通り私たちの神として、**共にいてくださる**ことを、全ての人にお示し下さるのだ——この信仰から溢れ出る**感謝と喜び**で、じっとして居られなくなり、飛び跳ねて踊り続けたのではないのでしょうか。

**私も** 84年になる人生を振り返りますと、主なる神の憐れみと守りと導きによって、溢れるほどの恵みの数々を頂いて、今日在ることを覚えて、**感謝に溢れます**。13才の8月に大日本帝国の無条件降伏、9月には**教科書の誤り**を習字の筆と墨で次々と塗りつぶす作業をさせられ、愕然としました。時代が変わろうと国が変わろうと、変わる事のない**本当の真理**を学ばなければと、心の底

から思いました。聖書を手にし、教会に導かれ、イエス・キリストに出会いました。説教を聞きながら聖書を読み進めることで、十字架の救いを信じ、19才でバプテスマを受けて、信仰者として生き始めました。主は私を**牧師としてお召し下さり**、今日までお用い下さっています。本当に感謝と喜びが満ち溢れて来ます。皆さんはいかがですか。

**神は愛である**——イエス・キリストのご生涯、特に**十字架と復活**に凝縮されている神の愛——聖書を読み、祈るほど、その愛の豊かさに感謝と喜びがこみ上げてきます。でも、その感謝と喜びを裸になるほど踊り上って表わす——そこまではしない自分。やはり**ダビデ**は私より**率直で純粹**です。偉いですね。

私たちも、イエス・キリストの**十字架の恵み**をことあるごとに覚えて、その救いを喜び、感謝して日々を送っていきましょう。周りの人に、恵みをお分けすることで、喜びが豊かにされていきます。ダビデのように出来なくても、心の中で喜び踊る信仰者になってまいりましょう。

祈ります：神さま、今日は裸になっても踊り続けたダビデの姿を学びました。私たちも、聖書によってイエス・キリストを知り、イエス・キリストが身近になるにつれて、あなたの愛と恵みの豊かさに、感謝が湧き上って参ります。もっともっと喜ぶ者にしてください。あなたからいただいた恵みを周りの者にお分けすることで、喜びと感謝を豊かにしていく者にしてください。イエス様、御霊を注いでください。そして私たちを、喜びと感謝で突き動かしてくださいますようお願いいたします。今日もこのようにして、兄弟姉妹と共に礼拝が守られていますことを、深く深く感謝します。主イエス・キリストの御名によって、祈ります アーメン